

学生との対話イン東北 2012

感想

グループ1 シニア) 早野 睦彦

予め質問事項とその回答が届いており、質問事項から派生した追加質問的なことや会社生活を終えたシニアの経験談に関心が高かったようです。

就中、次世代炉が多種多様であるにも関わらず、もんじゅについての関心の高さは予想外で、これからどのようにするのか、何の研究を続けるのかなどいくつかの質問が集まりました。

当方より、FBRの技術開発はSGなどをはじめとして技術的・経済的なハードルは高いが、達成できたあかつきには大いに人類に貢献できる技術であるとの所感を述べました。

いずれの学生も原子力の将来に不安を感じているのは致し方ないことですが、長期的な視野を持って昨今の風潮に流されることなく原子力エネルギーに自信をもって進んでもらいたいと、弊意を伝えることができたと思います。

全体におとなしく、些か物足りなさを感じました。

グループ2 シニア) 齋藤 伸三

今回の対話は、担当された遊佐先生及び学生幹事の帆加利さんが周到な準備をされ、予め学生からの質問とそれに対するシニアからの回答が整っていたので、対話は円滑に、密度濃く行われたと思われる。最後のグループ発表で一般社会への理解活動にはインターネットやフェイスブックを活用すべきであるとの意見が出てきたのは将に現代風であるが、具体的に誰が、どのように実践出来るかが課題であろう。また、大学で何を学ぶべきか、求められるものと言うテーマで対話を実施したグループでは人生訓も議論されたようで有意義な時間が持てたと感じられた。その他、1、2のグループで発表内容に疑問が感じられたこと、事前の質問と回答のやり取りもあった割には、グループ発表はあっさりしていると感じられるものもあり、議論をきちんとまとめることの重要性もしっかり身につけて欲しいと願うものである。

一方、東電福島事故は、若者の原子力に対する魅力、憧れを著しく傷つけるとともに、就職問題を通じた将来設計に大きな影響を与えている。さらに、これから、質と量の観点からどの程度学生が原子力専攻を選択するか先生方の悩みも大きい。この解決策は、被災された福島県の住民への対応と復興を十分に早急に行うとともに、単に「廃炉などに必要な人材や技術の維持・強化」と言うのではなく、今後のエネルギー政策の中での原子力の位置づけを堅固なものとするべき政府の責任であり、その認識を持って貰いたいものである。

グループ3 シニア) 三谷 信次

(1) 対話全体の感想

今回の対話の印象は、東北大学の学生さん達は大変礼儀正しく紳士的な印象を受けました。ただ少し謙虚なところがみられ都会の学生達によく見受ける軽い調子の良さが無い点は、短所よりも長所のように感じられました。伝統的に優秀な卒業生を排出されているのは、関係者が認めているところであり、燦し銀のように見受けました。発表技術などは企業や研究所へ入ればいやでも厳しい訓練を受けますから、場数を踏めば誰でもうまくなりましょう。

(2) グループ3の感想

予め質問をもらっていたため、対話前日にシニアが回答した結果を踏まえて対話に入ったため、極めて効率的に対話が進んだ。参加者一人ひとりに質問しても、しっかりした回答を引き出すことが出来たのは、周到な準備のたまものであったと思う。グループリーダーの丹野君の取りまとめも良かった。M1の谷君の話しぶりもよく纏まっていた。

B4の諸君との対話は、まだ慣れていないところもあり、これを機会に議論することに慣れていただけると有り難い。

グループ4 シニア) 若杉 和彦

グループ4では、SNW東北の菊地様とともに修士1年の学生6名と対話した。ここではエネルギーや原子力等の技術的な話題ではなく、これからの生き方やこれから飛び込む社会への不安からの質問や感想が多く出され、従来のシニアが話し過ぎる傾向は薄れ、学生とシニア相互の対話がより活発に行われたように感じた。今

やっておけば良いことと何か、社会人として何が大切か、昔と今の学生の違いは何か、よく言われる「官と民」の違いについてシニアの意見を聞きたい、会社では人事部が現場を本当に評価出来るのか、家庭教師をしているが原子力の安全を分かってもらうにはどうすれば良いか等々、対話が途切れることはなかった。これらに対してニアから長年の経験と知識から答えた。必ずしも全てが満点ではなかったと思うが、その努力に免じてお許しいただきたい。

安心したことは、マスコミ等による原子力や放射線に関する不正確情報が学生の心に刷り込まれていなかったことであり、学生達は思ったより平静でバランスある質問と会話が進行した。このことは東北大学石井先生、長谷川先生、遊佐先生はじめ教育関係者やSNW東北の熱心な活動に負うところが大きく、心から感謝申し上げたい。また、学生幹事帆加利君には対話会・懇親会の司会ととりまとめを担当していただいた。その経験は必ず将来役立つ力になると信じている。

グループ5 シニア) 山田 明彦

学生側が司会をしたことによるのか、これまで問題とされていたシニア側が大半を発言するのではなく、学生側からの補足質問が多く出て、質疑は活発だった。内容も的を得たものも多く、よく勉強しているように見受けられた。例えば、ストレステストでの対策の説明で、ハード中心に説明したが、教育、訓練などのソフト的な対策、対応策について鋭い質問があったのはその一例で、対策のポイントをついており、このような視野を広くもつ教育は原子力界では特に必要であるので、今後を期待したい。卒業後のことに関心があるのは当然だが、学生時代に何をしておくべきかについて関心があり、結構話が盛り上がった。原子力については、皆さん肯定的で、原子力の将来性について悲観的では無いように感じられたのは、心強い限りであった。

グループ6 シニア) 西郷 正雄

事前質問に回答を予め送っていたが、学生は、今初めて見るとのことより、最初に回答をレビューすることから始めなければならなくなった。現在行っている往復書簡での学生とのやり取りが頭にあったために、学生のレベルが、つつい良く原子

力を理解しているつもりでいるものと思って最初接してしまった。途中で、MOX燃料は分りますかと質問すると、分っているようにうなづくので、問題がないものと考えて進めた。対話会をしている段階では、スムーズに対話が進んだが、理解度は、また別であると後で分った。最後の発表の時に、低レベル放射線に関連する規制値に絡んで、どのような機関の情報が信頼できるかとの質問に放医研（放射線医学総合研究所）と説明をしたのが、「放射性廃棄物処理問題やエネルギー問題を改善するのに、最終処分に関するデータ収集などを行っている放医研」と、誤解された発表がなされたのには少し驚いた。対話会では、相手の学生のレベルを予めどの程度か掴み、対話中にも誤解が発生していないか、確認する接し方が必要だなと痛感した。